

没後 110 年 「カリエール展」

損保ジャパン日本興亜美術館（西新宿） 2016.09.10～11.20

19 世紀後半のパリでは、「印象派」が一大潮流を築いていたが、それを乗り越えようとする一つの芸術運動として「象徴主義」が誕生した時代である。

「ウジェーヌ・カリエール」(1849～1906) は、セピア色の画面に神秘的に浮かび上がる人物や母子像を描いたフランスの象徴主義を代表する画家である。

画伯は多彩な芸術家で絵画に止まらず挿絵や彫刻も手掛け、初期の絵画は色彩豊かであったが、最終的には「母子像」や著名人の「肖像画」を霞のかかったような茶褐色の画面に、明暗を強調して描く独特な絵画作品を制作した。

更に彫刻家「ロダン」と親交があり、ロダンの粗削りしかしていない彫刻と、背景の不明瞭な「カリエール」の人物画手法に類似点があるとされている。

本展は画伯没後 110 年の開催で、ひ孫らの全面的な協力のもと、油彩画を中心に「約 80 点」が展示され、代表的な主題である「母子像」や身の回りで繰り広げられる「日常の光景」「妻や子どもたち」「著名人の肖像画」など、様々な作品が展示されて親密な光景を幻想的に描いた画伯の神髄に迫る企画である。

<展示構成> 4つの区切り (Chapter) に分け画伯の半生を時系列的に紹介。初期から 1885 年頃まで 《病気の子ども》などの作品。

「晩年」1900 年頃～1906 年は「フランス絵画 100 年展」に出品した作品。

<代表的な作品>



《手紙》

1887 年頃



《ソフィー・デムソーの肖像》

1876 年頃



《宴会の自画像》

1898 年頃

これらの作品は何れも油彩・カンヴァス。